

25 年前のことなど

永 宮 健 夫

ご承知のように、57 年 12 月 2 日、物性研で「創立 25 周年および新実験棟竣工記念」の式典が行なわれました。だいぶ長い間ごぶさたしていたので、なつかしく大阪から出席しました。物性研には、創立のときから協議会および人事委員会のメンバーとして加わっていましたが、東大の 60 才定年のルールでお払い箱になり、その後約 25/2 年ごぶさたしていました。歴代の所長や昔の仲間に出て楽しい思いをし、またその後の物性研の発展の様子をきいたり見たりして、充実した半日を過ごしました。

そのとき頂いた「物性研だより」22-3、9 月号に創立当初のことなどが書かれています。特に三宅静雄さんの「物性研創立時の思い出など」は、正確に、かなりくわしく創立のいきさつを記述しています。創立にこぎつけるまでに熱心に働いた者の 1 人として、この「物性研だより」はおもしろい読物でした。創立について私からつけ加えることは余りありませんので、どうしてもよいことを 1 つ書き加えたいと思います。そして、あとで近頃の物性研究に対する感想めいたことを記させていただきます。

物性研（わが国の物性研究の中心になる研究所）を作ろう、という運動は、「物性論懇談会」あるいは「物性論グループ」から起きたように思います。物小委（物性論小委員会）が学術会議の物研連（物理学研究連絡委員会）で正式に認められて、創立の運動を引きついだのです。物小委のはじめの委員長は、穩厚な有山兼孝さんでした、そして設立直前に私になりました。それで、その直前のことをちょっと記します。

場所と規模について文部省で会議がありました。たぶん全国の研究所長会議みたいなものだったと思います。（研究所協議会というものだったそうです）私も出ました。物性研を作る場所として、1. 大阪か東京、2. 仙台、という案があったのです。仙台は、金研の拡充という案だったのですが、物小委で広根徳太郎さんが、仙台では実験器具・材料がすぐには得られないから駄目、といわれ、ついでに大阪もだめ、との御意見でした。このことを会議で私が申しましたら、増本量先生（当時の金研所長）が、声を荒らげて、そんなことはない、と反論されました。会議で印象に残っているのは、それだけです。その会議の前だか後だか、小さい部屋で小人数の討論が行なわれました。議長は兼重寛九郎先生でした。私は、このとき始めて兼重先生に接して、その穩厚で思慮深い、且つまとめのお上手なお人柄に感嘆いたしました。会議では稲田文部事務次官が主役で、大阪に作るならば、せいぜい 12 講座、しかも、大阪では引受

永宮 健夫

ける何の用意もなく、土地もなく、それで作れとは何たることか、と吐きすてるように申しました。私はムッとしましたが、兼重先生は、まだ入るかどうか分らないのにお風呂をわかつて待っている、というようなものだ、それは酷だ、といわれました。稲田次官のはらは、理工研の改組と物性研創立をからめる、ということで決まっていたのです。私は、抗しようもないと思ったけれど、残念でした。岡野課長（大学学術課長だったかな？ 私の中学のクラスメートです）が、その代りに阪大にはヘリウム液化装置を上げなければ、といったことが記憶に残っています。

さて、東大設置がきまって、設立準備委員会というものが作られ、それが安田講堂でひらかれました。総長矢内原さんの司会で第一回の会議がひらかれたとき、私も委員の1人で出席しました。私は有山さんから、“物性研設立を果した物小委として、東大の委員の方々に、お引受頂いたことに対する御礼をいってくれ”と頼まれまして、尤もなことだと思って、御礼の辞を申しました。そしたら皆さん、総長および部局長の方々、黙って知らん顔です。会議のあと、武藤俊之助さん（当時理工研所長）がいうには、とんでもないことをいって呉れた、部局長の人々は、物小委など問題にしておらぬ、文部省からの要請で引受けたただけだ、関係のないつまらんことを言う思い上りの男がいた、ということでしたよ、とのことでした。そういえば、矢内原さんも、ジロリと私をみて、どこの馬の骨か、という様子でした。東大という所は、私の出身校ではあるけれど、そんな所かと思い知らされたことでした。そういうことで、記念式典のとき、現平野総長がはじめて物性研を親しく訪れたという話をきいて、感激した次第です。

もう1つ、創設準備委員会で記憶に残るのは、物性研の英語名のことです。小谷正雄先生は Solid State and Chemical Physics という名を提出しておられました。英国の故 Coulson 教授に、Solid State という名詞と Chemical という形容詞を並べてよいか、ときかれ、よいという返事を得ておられたということです。しかし委員会では、矢内原総長が、かんたんに Solid State だけでよいと裁断されました。これは、わが意をえたりと思いました。私は F. Seitz に意見を求めて、Institute for Material Physics という案をえていましたが、Material というのは“材料”というニュアンスが強いから、という意見があって、だめでした。（なお、阪大基礎工学部に材料工学科というのを作りました時は、他のアメリカ人の意見も入れて、Materials Physics という名をとりました。）

色々の思い出もありますが、次に、物性研を一応離れたことを書きます。「物性研究」が今なお刊行されていることは、私にとって驚きです。むかし、昭和16年のおわりの頃、久保亮五さんが東大を卒業された直後のことですが、物性論懇談会なるものを組織しようという話がおきて、結局、私が organizer になり、戦争末期までいくつかの会合を開きました。「物

性論研究」1～4号の印刷物も私が出しました。大阪に前田屋という出版屋さんがあって、小林稔さんから紹介されたのですが、私の熱心なファンみたいなものになって、印刷を引受けてくれました。（戦後に音沙汰なく、どうしたかと時折気にかかっています）1～4号は薄っぺらな冊子ですが、久保さんの1次元物質の統計力学、上田良二さんの“まさつ機構”の紹介、高橋秀俊さんの水の物性など、おもしろく豊かな論文がのっていました。高橋さんは、氷（水でなく）の物性の話を懇談会でされましたが、発表されず、あとできいてみると、机の引出に入れておいた論文が戦火で焼けてしまった、とのこと、残念です。前述のように、物性研の構想は、戦後のみじめな状態で、何とか物理の一部である物性研究を、世界の最高レベルまで引上げようという願望から出たものです。

私は年とってしまいまして、もう上述のような駄文を書く能力しかなくなっていました。時折 J. Phys. Soc. Japan や Progress などを見ているが、どうも分らない論文が多くて困ります。物性研究はほんとに進歩したのでしょうか。私の時代と違って、頭のよい方々が沢山おられるようです。何でもよく分るらしい。でも、多くの論文で、問題の焦点がどこにあるのか、originality がどこにあるのか、はっきりしない場合が多いように思います。物事は複雑多岐になって来ましたので、originality を出すことは難しさを加えているでしょう。しかし、1つは表現の問題でしょう。明確に“新しさ”を表現することが必要です。相変わらず、大方の人々の英文構成の拙劣もあって（その点、外国人の論文でも拙いのが多いが）、よけい焦点がぼやけています。先日、山田科学振興財団の会合で、独創性という言葉の問題にして、独りで創るという意味の英語はないようだ、と申しましたら、福井謙一さんが、どの研究でも98%までは既存のものだ、といわれ、生物学の神谷宣郎さんは、どんな研究も既存の材料の組み合わせではないか、といわれました。そうとも思わないのですが、originality の解釈は難しいことです。この困難が多くの論文に現われているのかも知れません。しかし、進歩は、人にアピールする originality の表現があって、はじめてなされると思うのです。

物性研設立の目的がほんとに達成されたのかどうか、少数の大変すぐれた論文を見るときには楽観的になり、大多数の訳の分らない論文をみるとときには悲観的になっています。